

犯罪報道の評価と犯罪不安感

著者	大谷 奈緒子, 川島 安博, 小川 祐喜子, 川上 孝之, 松本 憲始, 福田 朋実
著者別名	OTANI Naoko, KAWASHIMA Yasuhiro, OGAWA Yukiko, KAWAKAMI Takayuki, MATSUMOTO Kenji, FUKUDA Tomomi
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	54
号	1
ページ	57-68
発行年	2016-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008665/



犯罪報道の評価と犯罪不安感*¹

Crime Reporting and Fear of Crime

大谷奈緒子	Naoko OTANI
川島 安博*	Yasuhiro KAWASHIMA
小川祐喜子**	Yukiko OGAWA
川上 孝之***	Takayuki KAWAKAMI
松本 憲始****	Kenji MATSUMOTO
福田 朋実*****	Tomomi FUKUDA

はじめに

日本の犯罪情勢は、刑法犯の認知件数が1996年から毎年戦後最多を記録し、2002年に約369万件に達して以降は減少に転じていることから、統計上は一定の改善傾向にある（法務省2015）。そうした情勢をなぞるように、人びとの犯罪や治安に関する意識も変化してきた。阪口祐介（2008：62）によれば、日本社会における人びとの犯罪不安や治安悪化に対する意識は、1990年代後半より急激に上昇し、犯罪を深刻な社会問題として捉えるようになったと指摘している。

近年に至っては、刑法犯の認知件数の減少にあわせる形で、人びとの犯罪や治安に対する意識は安定傾向にある。内閣府が2012年に実施した「治安に関する特別世論調査」では、治安に関する意識と認識について調査し、2006年調査と比較している。治安に関する意識では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた「安全と思う」は59.7%となり、2006年の46.1%よりも13.6ポイント増加している（内閣府2012：1）。

また、治安に関する認識では、「よくなったと思う」と「どちらかといえばよくなったと思う」を合わせた「よくなったと思う」は15.8%で、2006年の11.3%よりも4.5ポイント増加した。他方、「どちらかといえば悪くなったと思う」と「悪くなったと思う」を合わせた「悪くなったと思う」は81.2%と、2006年の84.3%よりも3.2ポイント減少する結果となった（内閣府2012：2）。

このように日本の犯罪情勢は統計上改善し、それを反映してか、人びとの犯罪や治安に対する意識

*川島安博 東洋大学現代社会総合研究所 **小川祐喜子 東洋大学 ***川上孝之 明海大学
****松本憲始 東洋大学 *****福田朋実 宮崎公立大学

も安定しているように見える。しかしながら、凶悪な殺傷事件は後を絶たず、特殊詐欺やサイバー犯罪、危険ドラッグに係る事件など、マス・メディアが犯罪を報じない日はない。そして、日々繰り返される犯罪報道は、それに接する人びとに対して何かしらの影響を与えている。大谷奈緒子ら(2016)が行った犯罪報道での受け手の報道評価に関する調査によれば、インターネット時代の昨今においてもマス・メディア報道の人びとに対する影響は依然大きい。

以上の問題関心から、本稿では、人びとの犯罪不安などの意識形成とその問題点について着眼し、マス・メディアによる犯罪報道がその受け手である人びとに対してどのような影響を与えているのか、実証的に検討した。

1. 問題の視座

マス・メディアによる犯罪報道をめぐる既存研究では、プライバシーと報道の自由との関わり、知る権利と報道規制との関わり、少年犯罪報道での問題などを主なテーマとして取り扱ってきた。ただ他方で、犯罪報道の効果研究については十分な知見の蓄積は得られていない。例えば、牧野智和(2012:21)は国内の犯罪報道研究を整理したうえで、最も重要な課題である犯罪についての意識とマス・メディアとの関連についての研究で明確な知見が得られていない点を指摘している。

本稿では、人びとの犯罪に対する意識とマス・メディアとの関連について検討するにあたり、マス・メディア効果研究の1つである「培養仮説」の視点に準拠した。G. ガーブナー (George Gerbner) による文化指標プロジェクトのうち、「培養分析」は、「テレビのメッセージが、社会的現実に対する受け手の認識にどのような独自の影響をもたらしているか」(竹下俊郎2008:56)について明らかにするもので、本研究において援用するならば、人びとはマス・メディアによる犯罪報道を享受することで、犯罪についての意識や犯罪不安、いわゆる犯罪感をどう「培養」していくのかについて検討することとなる。

なお、犯罪についての意識とマス・メディアとの関連について分析した事例には、阪口(2008)によるメディア接触と犯罪不安に関する研究がある。阪口は、ガーブナーの培養分析を含む欧米のメディア接触仮説に関する研究を日本に適用することを検討したうえで、犯罪不安の重要な規定要因をマス・メディアからの影響と考え、メディア接触(新聞、新聞地方欄、テレビ全国ニュース、テレビ地方ニュース)と本人、および他者(家族、親戚、親しい友人)に対する犯罪不安との関係を実証研究した。その結果、全体的に「メディア接触が犯罪不安を高めない」(阪口2008:67)点を明らかにした。ただし、属性や犯罪被害経験の有無による関連性について、①本人が犯罪被害経験者では、新聞の地方欄の接触が他者犯罪不安を高めること、②他者が犯罪被害経験者では、全国ニュースの接触が他者犯罪不安を高めること、③子どもを持つ親の場合、全国ニュースの接触が他者犯罪不安を高めること、④配偶者を持つ男性の場合、全国ニュースの接触が他者犯罪不安を高めること、という知見

を得ている（阪口2008：70）。加えて阪口の研究では、メディア接触による自身の犯罪不安への影響はみられなかったが、自分以外の重要な他者への犯罪被害不安への影響を明らかにした。

本稿では、ガーブナーの培養分析とともに、阪口によるメディア接触と犯罪不安に関する研究を援用し、具体的には、「新聞」「テレビ」のマス・メディア接触と「犯罪被害への不安」「犯罪被害経験」「防犯対策に対する評価」の各項目との関係进行分析し、マス・メディア接触と犯罪不安や犯罪意識の形成との関係について検討した。

2. 調査の概要

本研究を実証的に取り組むにあたり、犯罪報道研究会¹が実施した「マスコミ報道についての意識調査」のデータを用いた。調査の概要は次の通りである。調査対象者は首都圏50キロ圏内在住の20歳以上の男女1,000名、対象者の標本抽出は住民基本台帳から層化二段無作為抽出法（50地点）で実施した。調査期間は2014年2月14日から28日の2週間とし、質問紙による訪問面接聴取法（不在の場合は留置）で行った。有効回答票は450（有効回収率45.0%）であった。なお、実査は（株）サーベイリサーチセンターへ業務委託した。

質問紙では、「犯罪報道の評価と影響」「実名報道と匿名報道の認識」「人びとの犯罪に対する認識と犯罪経験」など報道全般に係わる項目のほか、実査直前に発生した3つの事件に対する「報道評価」「メディア接触」「基本属性」について尋ねた。

前掲の3つの事件は、2013年11月27日に発生した「千葉主婦殺害事件」、2013年12月3日に発覚した「猪瀬元東京都知事政治資金問題」、2013年12月22日に発生した「餃子の王将社長射殺事件」で、いずれも実査の約2～3ヶ月前に発生もしくは発覚している。なお、3つの事件のうち、被疑者が逮捕されたのは「千葉主事殺害事件」のみで、「餃子の王将社長射殺事件」は被疑者不明（2016年7月現在）、「猪瀬元東京都知事政治資金問題」は、事件の性質上、被害者は登場しない。

3. メディア接触と犯罪不安感

（1）日常生活における犯罪不安

人びとが日常生活で遭遇する犯罪（個人や自らの所有物に対する被害、詐欺、凶悪犯罪など）に対する不安感について、「非常に不安」と感じている犯罪には、「振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪」（8.8%）、「自転車が盗まれる」（8.4%）、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」（7.9%）があげられる。また、人びとが日常で遭遇する犯罪に対して「非常に不安」と「かなり不安」を合わせた“不安”に思っている項目では、「自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる」（28.8%）が最多

表1 日常生活で遭遇する犯罪に対する不安

犯罪項目	n	非常に不安	かなり不安	どちらでもない	やや不安	不安はない
自宅にどろぼう（空き巣など）に入られる	444	7.9%	20.9	18.2	41.9	11.0
ひったくりにあう	441	5.9	16.6	23.1	38.8	15.6
自転車が盗まれる	439	8.4	17.1	25.1	26.9	22.6
自動車やオートバイが盗まれる	437	5.5	12.6	27.0	23.8	31.1
すりや置き引きなどの窃盗にあう	439	3.9	17.8	22.8	37.1	18.5
自動車内の金品が盗まれる	440	3.6	11.6	26.4	28.2	30.2
痴漢にあう	436	3.9	11.9	21.8	22.5	39.9
振り込め詐欺や悪徳商法などの詐欺犯罪にあう	443	8.8	12.9	18.7	32.1	27.5
自宅や自動車に落書きされたり、壊されたりする	440	4.3	12.0	23.0	30.2	30.5
自宅や敷地内に無断で侵入される	440	6.8	14.5	20.9	35.2	22.5
不審者に声をかけられたり追いかけられたりする	441	5.9	9.3	26.3	28.6	29.9
人に付きまといわれたり、のぞかれたりする	441	4.3	10.4	23.4	26.5	35.4
インターネットを介した犯罪の被害にあう	440	6.6	16.1	22.0	26.4	28.9
凶悪犯罪（殺人、放火、強盗、強姦）にまきこまれる	441	5.2	10.2	26.1	34.9	23.6

で、以下、「自転車が盗まれる」(25.5%)、「インターネットを介した犯罪の被害にあう」(22.7%)、「ひったくりにあう」(22.5%)、「すりや置き引きなどの窃盗にあう」と「振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあう」(ともに21.7%)の順に多い(表1参照)。

そこで、日常生活で遭遇する犯罪への不安感の程度とメディア接触との関連性について検討するために、表1の犯罪項目のうち、昨今の報道特集として取り上げられる振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪²(以下「振り込め詐欺等」と、殺人・放火・強盗・強姦といった凶悪犯罪³について取り上げ、新聞とテレビの接触時間と当該事件に対する不安感との関連性について確認した。

(2) 新聞の閲読時間と犯罪不安

人びとの新聞閲読時間を「30分未満」「30分～1時間未満」「1時間以上」の3カテゴリーに分け、接触時間別にそれぞれの犯罪不安を比較した。接触時間の長さに比例し、不安感が高くなるのか、あるいは低くなるのかについて検討した。

“振り込め詐欺等への犯罪不安”は、「30分未満」層、次いで、「30分～1時間未満」層において不安感が高く、他方、「1時間以上」層で不安感が低い。また、“凶悪犯罪へ巻き込まれる不安”では、「30分未満」層で不安感が高く、「1時間以上」層で不安感が低い傾向に変わりないが、その割合は、“振り込め詐欺等への犯罪不安”に比べ低い。

このことから、犯罪不安感は犯罪によって異なり“振り込め詐欺等への犯罪不安”のような身近な

表2 新聞閲読時間別 犯罪に対する不安感

犯罪項目	閲読時間	n	非常に不安	かなり不安	どちらでもない	やや不安	不安はない
振り込め詐欺等への犯罪不安	30分未満	200	9.5%	13.5	19.5	32.5	25.0
	30～1時間未満	96	8.3	16.7	15.6	31.3	28.1
	1時間以上	27	7.4	7.4	25.9	14.8	44.4
凶悪犯罪へ巻き込まれる不安	30分未満	199	7.0	12.6	25.6	33.7	21.1
	30～1時間未満	96	1.0	6.3	28.1	35.4	29.2
	1時間以上	27	3.7	7.4	37.0	18.5	33.3

注1) χ^2 検定：度数5以下があるため検定除外

注2) 新聞を読まない人は含まない。

犯罪への不安感の方が高い。また、新聞閲読時間が長い程、犯罪不安感が低い傾向にある（表2参照）。

（3）テレビの視聴時間と犯罪不安

次に、テレビ視聴時間と犯罪不安との関連性について検討する。ここでは、人びとの平日におけるテレビ視聴時間を「2時間未満」「2時間～4時間未満」「4時間以上」の3カテゴリーに分け、それぞれの犯罪不安を比較した。

まず、“振り込め詐欺等への犯罪不安”では、視聴時間が長くなるほど、「非常に不安」「かなり不安」の回答が多くなる。

他方、“凶悪犯罪へ巻き込まれる不安”では、度数は多くはないが、視聴時間が短くなるほど、「非常に不安」の割合が高いが、他方で、「不安はない」の割合も高くなる。

以上から、身近な犯罪への不安感が高い傾向は新聞と同じであるが、テレビの場合は、視聴時間よりも視聴番組ジャンルの影響が大きいと考えられることから、視聴時間と凶悪犯罪への不安感との関連性はあまりみられない（表3参照）。

4. 個人属性と犯罪不安感

犯罪不安感には、個人の性別、年代、家族構成、および犯罪経験が関連してくる（阪口2008）。そこで、本節では個人属性と犯罪経験が犯罪不安感にどのように影響しているのかについて検討した。

（1）性別および年代別にみた犯罪経験

まず性別および年代別に犯罪経験の全体的な傾向を確認する。

表3 テレビ視聴時間別 犯罪に対する不安感

犯罪項目	視聴時間	n	非常に不安	かなり不安	どちらでもない	やや不安	不安はない
振り込め詐欺等への犯罪不安	2時間未満	163	6.7%	11.0	14.7	35.6	31.9
	2時間～4時間未満	175	9.7	13.7	21.1	30.3	25.1
	4時間以上	93	10.8	16.1	20.4	26.9	25.8
凶悪犯罪へ巻き込まれる不安	2時間未満	162	6.2	9.3	22.2	35.8	26.5
	2時間～4時間未満	175	5.7	9.7	29.1	33.1	22.3
	4時間以上	92	4.3	13.0	26.1	35.9	20.7

注1) χ^2 検定：度数5以下があるため検定除外

注2) テレビを見ない人は含まない。

性別では、男女とも「自転車が盗まれた」経験が最も多い。男性に多い犯罪経験は「自宅内や敷地内に無断で侵入された」(3.5%)と「インターネットを介した犯罪の被害にあった」(3.0%)であり、女性に多い犯罪経験は「振り込め詐欺や悪質商法などの犯罪被害にあった」(6.4%)、「不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした」(3.2%)、「すりや置き引きなどの窃盗にあった」(2.8%)であった。いずれも有意差はみられないものの、性別によって遭遇しやすい犯罪が異なる(表4参照)。

年代別の犯罪経験については、年代に関係なく「自転車が盗まれた」が最も多い。40歳代の中年層は「不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした」(5.3%)が、60歳代や70歳代以上の高齢層は「振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあった」(60歳代6.3%、70歳代以上11.0%)が多く、いずれも有意差はみられないものの、性別と同じく、年代によって遭遇しやすい犯罪が異なることがわかる(表5参照)。

(2) 家族構成別 犯罪不安

ここでは、18歳未満もしくは70歳以上の同居している家族の有無による家族構成の違いと犯罪不安の関連性についてみていく。一般的に、18歳未満の子どもと70歳以上の高齢者は犯罪に遭いやすいことが指摘されており、この年代を持つ家族は、重要な他者に対する犯罪不安を持つものと考えられる。本分析では、「自転車が盗まれた」「すりや置き引きなどの窃盗にあった」「振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあった」「自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりした」「自宅や敷地内に無断で侵入された」「不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした」「人につきまとわれたり、のぞかれたりした」「インターネットを介した犯罪の被害にあった」という、家族が遭遇しやすい8つの犯罪項目について検討した。

まず、性別にみたところ、有意差がみられたのは「自宅にどろぼう(空き巣など)に入られる」「ひったくりにあう」「痴漢にあう」「振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあう」「不審者に声を

表4 性別 犯罪経験 (MA)

	n	暴力や傷害などの暴力的な犯罪にあった	自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりした	自宅や敷地内に無断で侵入された	自宅にどろぼう(空き巣など)に入られた	ひったくりにあった	自転車や自動車などが盗まれた	自動車やオートバイが盗まれた	インターネットを介した犯罪の被害にあった	人につきまとわれたり、のぞかれたりした	不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした	その他	痴漢にあった	
男性	230	-	1.7%	0.4	5.2	-	1.7	1.7	-	-	-	-	-	
女性	218	-	1.4	0.5	8.3	0.5	2.8	0.5	-	-	-	-	-	
		振り込み詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあった	自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりした	自宅や敷地内に無断で侵入された	自宅にどろぼう(空き巣など)に入られた	ひったくりにあった	自転車や自動車などが盗まれた	自動車やオートバイが盗まれた	インターネットを介した犯罪の被害にあった	人につきまとわれたり、のぞかれたりした	不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした	凶悪犯罪(殺人、放火、強盗、強姦)にまきこまれた	その他	年間被害にあったことはない
男性	2.6	2.2	3.5	0.9	-	3.0	-	3.0	-	-	-	3.0	80.4	
女性	6.4	2.3	1.4	3.2	2.3	-	-	-	-	-	-	0.9	78.0	

注) χ^2 検定：度数5以下があるため検定除外

表5 年代別 犯罪経験 (MA)

	n	暴力や傷害などの暴力的な犯罪にあった	自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりした	自宅や敷地内に無断で侵入された	自宅にどろぼう(空き巣など)に入られた	ひったくりにあった	自転車や自動車などが盗まれた	自動車やオートバイが盗まれた	インターネットを介した犯罪の被害にあった	人につきまとわれたり、のぞかれたりした	不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした	その他	痴漢にあった	
20歳代	45	-	2.2%	-	8.9	-	2.2	-	2.2	-	-	-	2.2	
30歳代	74	-	1.4	-	5.4	-	1.4	-	-	-	-	-	-	
40歳代	75	-	1.3	-	9.3	-	6.7	2.7	1.3	-	-	-	1.3	
50歳代	85	-	-	-	8.2	1.2	-	2.4	-	-	-	-	-	
60歳代	96	-	4.2	1.0	3.1	-	2.1	1.0	1.0	-	-	-	1.0	
70歳代以上	73	-	-	1.4	6.8	-	1.4	-	-	-	-	-	-	
		振り込み詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあった	自宅や自動車などに落書きされたり、壊されたりした	自宅や敷地内に無断で侵入された	自宅にどろぼう(空き巣など)に入られた	ひったくりにあった	自転車や自動車などが盗まれた	自動車やオートバイが盗まれた	インターネットを介した犯罪の被害にあった	人につきまとわれたり、のぞかれたりした	不審者に声をかけられたり、追いかけられたりした	凶悪犯罪(殺人、放火、強盗、強姦)にまきこまれた	その他	年間被害にあったことはない
20歳代	2.2	2.2	2.2	-	-	4.4	-	-	-	-	-	-	-	
30歳代	2.7	-	2.7	2.7	-	2.7	-	4.1	85.1	-	-	-	-	
40歳代	4.0	5.3	2.7	5.3	2.7	-	1.3	72.0	-	-	-	-	-	
50歳代	-	3.5	-	2.4	-	1.2	3.5	83.5	-	-	-	-	-	
60歳代	6.3	1.0	3.1	-	-	2.1	1.0	80.2	-	-	-	-	-	
70歳代以上	11.0	1.4	4.1	1.4	4.1	-	1.4	74.0	-	-	-	-	-	

注) χ^2 検定：度数5以下があるため検定除外

かけられたり、追いかけられたりする」「人につきまともわれたり、のぞかれたりする」であり、特に女性で不安が高い(表6参照)。これらは、日常生活における女性の犯罪不安と一致すると考えられる。しかし、年代別による犯罪不安については、いずれの項目でも有意差はみられなかった。

続いて、18歳未満もしくは70歳以上の家族の有無による家族構成の違いでは、18歳未満の家族がいる場合には、「自転車や盗まれる」「自宅や敷地に無断で侵入される」「インターネットを介した犯罪の被害にあう」「自動車やオートバイが盗まれる」について、70歳以上の家族がいる場合には、「振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあう」について有意差がみられた(表7参照)。このことから、重要な他者となる家族が、犯罪に対する不安感を増大させる要因の一つであることがわかる。

(3) 個人属性別 防犯対策

犯罪不安の軽減には、警察を含む防犯対策への信頼度の高さとの関連性が考えられる。そこで、性別、年代別、家族構成別に防犯対策に対する評価を比較したところ、性別、年代別、家族構成のいずれについても有意差はみられなかった。ただし、18歳未満または70歳以上の家族の有無では、防犯対策に対する評価に違いがみられた(表8参照)。18歳未満の家族がいる場合は「警察に治安を任せられることができる」に、70歳以上の家族がいる場合は「対策をすれば犯罪にあわない」に、それぞれ有意差がみられた。また、いずれも該当年齢の家族がいないケースにおいては、防犯対策に肯定的な評価をしていることから、必ずしも犯罪不安を軽減しているわけではない。

では、何が犯罪不安を軽減させるのであろうか。有意差はないものの、男女とも「何らかの防犯対

表6 性別 犯罪に対する不安感

犯罪項目	性別	n	非常に不安	かなり不安	どちらでもない	やや不安	不安はない
自宅にどろぼう(空き巣など)に入られる**	男性	230	7.8%	23.5	17.0	35.7	16.1
	女性	217	7.8	18.9	19.4	48.4	5.5
ひったくりにあう***	男性	228	5.3	15.8	25.4	28.9	24.6
	女性	216	6.5	17.6	20.4	49.1	6.5
痴漢にあう***	男性	226	2.7	10.2	17.8	12.0	57.3
	女性	214	5.1	13.6	26.6	33.2	21.5
振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあう**	男性	229	7.4	10.9	15.7	31.0	34.9
	女性	217	10.1	15.2	21.7	32.7	20.3
不審者に声をかけられたり、追いかけられたりする***	男性	229	3.5	7.0	26.2	24.5	38.9
	女性	215	8.4	12.1	26.5	32.6	20.5
人につきまともわれたり、のぞかれたりする***	男性	230	3.9	7.0	20.0	22.6	46.5
	女性	214	5.1	14.0	27.1	30.4	23.4

注1) χ^2 検定: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注2) 有意差がみられた項目のみで作成

表7 家族構成別 犯罪に対する不安感

犯罪項目	家族構成別	n	非常に不安	かなり不安	どちらでもない	やや不安	不安はない
自転車が盗まれる*	18歳未満の家族がいない	313	7.8%	15.9	28.2	24.0	24.0
	18歳未満の家族がいる	121	9.1	19.8	16.5	35.5	19.0
自宅や敷地に無断で侵入される**	18歳未満の家族がいない	313	4.8	13.2	22.6	33.2	26.1
	18歳未満の家族がいる	120	11.7	15.0	15.8	43.3	14.2
インターネットを介した犯罪にあう***	18歳未満の家族がいない	313	4.8	13.2	22.3	25.8	33.9
	18歳未満の家族がいる	120	10.0	24.2	19.2	28.3	18.3
自動車やオートバイが盗まれる*	18歳未満の家族がいない	305	4.9	11.1	30.4	20.6	33.0
	18歳未満の家族がいる	121	6.6	17.4	16.5	31.4	28.1
振り込め詐欺や悪質商法などの詐欺犯罪にあう*	70歳以上の家族がいない	331	6.9	13.0	16.9	31.7	31.4
	70歳以上の家族がいる	102	14.7	10.8	22.5	32.4	19.6

注1) χ^2 検定: *** p < .001, ** p < .01, * p < .05

注2) 有意差がみられた項目のみで作成

表8 家族構成別 防犯対策について

犯罪項目	家族構成別	n	とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	まったくそう思わない
警察に治安を任せられることができる**	18歳未満の家族がいない	312	5.4%	44.2	28.5	17.3	4.5
	18歳未満の家族がいる	121	5.8	30.6	35.5	14.9	13.2
対策をすれば犯罪にはあわない*	70歳以上の家族がいない	330	2.7	22.7	33.3	28.2	13.0
	70歳以上の家族がいる	102	8.8	17.6	39.2	22.5	11.8

注) χ^2 検定: ** p < .01, * p < .05

策をしてみたい」で肯定的評価が半数を超えており、具体策は持ち合わせてはいないが、何らかの防犯対策によって犯罪不安を軽減していることが考えられる（表9参照）。

おわりに

本稿では、犯罪報道の受け手を対象に実施した質問紙調査のデータをもとに、新聞、テレビのマス・メディア接触、および個人属性と「犯罪被害への不安」「犯罪被害経験」「防犯対策に対する評

表9 性別 防犯対策：何らかの防犯対策をしてみたい

性別	n	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも いえない	あまり そう思わない	まったく そう思わない
男性	230	9.6%	49.1	29.6	9.6	2.2
女性	217	15.7	49.8	27.2	6.5	0.9

注) χ^2 検定：度数5以下があるため検定除外

価」の各項目との関係について考察した。分析では、以下の点が明らかになった。

第一に、人びとのメディア接触と犯罪被害への不安との関連性はみられなかった。これは阪口(2008)の「全体で見るとメディア接触が犯罪不安を高めない」(阪口2008:67)という知見と一致する。

ただし犯罪の内容によって、メディア接触と犯罪不安の関連性の違いが確認でき。まず身近な犯罪である“振り込め詐欺等への犯罪不安”については、新聞の閲読時間が長いほど犯罪不安が低く、かつ、テレビの視聴時間が長いほど犯罪不安が高くなった。次に“凶悪犯罪へ巻き込まれる不安”については、新聞の閲読時間が短い層で不安感が高く、テレビの接触時間の影響はあまり受けていない。犯罪の内容によって、メディアの人びとの犯罪不安への影響は異なっており、かつ活字メディアか映像メディアかというメディア特性とメッセージの内容が犯罪不安感に関係している可能性は否めない。

今後、培養仮説のアプローチから、テレビのメッセージが受け手の社会的現実の認識へ影響していることについて考察を深めることを念頭に置き、送り手の犯罪報道と受け手の不安感の醸成について関連性を明らかにするため、送り手の報道フレームと受け手の不安感との総体的な分析が不可欠となってくる。

第二に、個人属性と犯罪被害への不安との関連性については、性別と家族構成において一部の犯罪に対する不安感が増す可能性がみられた。なかでも、女性では「人につきまとわれる」「不審者に声をかけられる」といった犯罪に対する不安感が高く、18歳未満の家族がいる場合には「自転車が盗まれる」「自宅に無断で侵入される」「インターネットを介した犯罪」といった犯罪に対して不安感が高くみられたことから、日常で感じる犯罪不安が個人属性によって異なることが読み取れた。個人属性による犯罪との距離感も、メディア接触と同じく、人びとの犯罪不安を増す要因になっていると考えられる。加えて18歳未満もしくは70歳以上の家族がいる場合にみられた特徴は、阪口(2008)が提示した「重要な他者への犯罪被害不安」に関連する知見と考えられるため、メディア接触と合わせた分析の積み上げが今後の研究課題となってくる。

注

- 1 本研究は、2012～2015年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(研究代表者大谷奈緒子)で実施した「犯罪報道における問題の顕在化と受け手の報道評価に関する実証的研究」の研究成果の一部を発表するものである

(JSPS 科研費 JP24530658)。本研究は「犯罪報道研究会」によって遂行した。研究会の構成員は、共著者の他、島崎哲彦（東洋大学現代社会総合研究所）、薬師寺克行（東洋大学）、四方由美（宮崎公立大学）赤尾光史（元日本新聞協会）、伊達康博（帝京大学）、緒川直人（東洋大学）、柳瀬公（東洋大学）である。

2 高齢者を中心に被害者は、莫大な損害を被る悪徳詐欺犯罪。

3 重篤犯罪。

〈参考文献〉

大谷奈緒子（2016）「犯罪報道における問題の顕在化と受け手の報道評価に関する実証研究」『平成24～27年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））研究成果報告書』

阪口祐介（2008）「メディア接触と犯罪不安：『全国ニュース』と『重要な他者への犯罪不安』の結びつき」『年報人間科学』29-2 :pp.61-74

竹下俊郎（2008）『増補版 メディアの議題設定機能——マスコミ効果研究における理論と実証』学文社

内閣府政府広報室（2012）『『治安に関する特別世論調査』の概要』

法務省（2015）『平成27年版 犯罪白書』<http://hakusyol.moj.go.jp>（2016.7.28閲覧）

牧野智和（2012）「犯罪報道研究の現状と課題」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20号-1 :pp.13-24

警視庁（2016）「平成26、27年の犯罪情勢」<https://www.npa.go.jp/toukei/seianki/h26-27hanzaizyousei.pdf>（2016.7.28閲覧）

【Abstract】

Crime Reporting and Fear of Crime

Naoko OTANI
Yasuhiro KAWASHIMA
Yukiko OGAWA
Takayuki KAWAKAMI
Kenji MATSUMOTO
Tomomi FUKUDA

The primary objective of the present study is to examine the relationship between crime uneasiness and criminal reports. This study used a questionnaire survey, of which 450 valid samples were gathered from men and women age 20 years or older, who reside within a 50km radius from the center of Metropolitan Tokyo (N=1,000 people, a 45.0% response rate). The investigation period was from February 14 to 28, 2014. Our analyses are based on the viewpoint of “Cultivation Analysis” which is one of the media effect theories for examining data.

The results of the analysis revealed that (1) there was no relationship between crime uneasiness and media contact; and (2) a possible relationship between some personal attributes and crime uneasiness was observed.